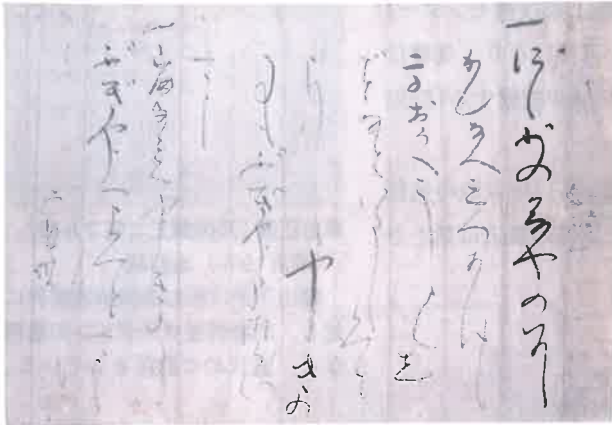


高岡銅器

1. 江戸期 高岡鑄物の発生と興隆



前田利長書状（慶長年間）5月30日付 当館蔵
西部金屋から高岡に鑄物師を招いている。

法（同業者が守るべき最も大切なきまり）の厳守を誓い、代替わりには新しく免許状を願い受け、年頭や折々の礼を尽くすなど並々ならぬ心遣いをしていました。そして真継家は鑄物師らに、朝廷が認めた諸国通行の自由、山林竹木伐採などの特権を与えたのです。

高岡では、江戸後期頃には梵鐘や大型の灯籠、花瓶などの銅器製造も本格化しました。また塩釜やニシン釜などの“ヒット商品”も生み出し、販路も全国に拡大し一層盛んになりました。

江戸時代末期には、新しい展開をみせた銅器鑄物技術の進展により、仏具や花瓶など日用品で装飾・鑑賞性の高い製品を産出します。また横浜・神戸などの「居留地貿易」にのり出す先進的な銅器問屋が現れ、国内はもとより海外にも盛んに輸出されるようになります。

加賀前田家2代当主・前田利長は、高岡開町2年後の慶長16年（1611）に、町づくりのため、鑄物発祥の地である河内国丹南郡（現・大阪府堺市・松原市の一部）の流れをくむ、越中国砺波郡西部金屋村（現・高岡市戸出西部金屋）の鑄物師（鑄物職人）を招きました。利長は彼らに、千保川対岸の5,000坪の土地（拝領地）を無償で与え、また諸役（税）も免除しました。高岡鑄物師は、はじめ鍋釜・鋤鍬などの鉄鑄物を製造していました。

その後も、加賀藩の手厚い保護により急速に力を増し、北国筋（若狭より越後までの北陸全域）における鉄鑄物業を支配するまでの勢力を保有し栄えていきました。

中世以来、全国の鑄物師は真継家（河内国丹南郡の領主で下級公家）に支配されていました。鑄物師たちは、真継家が定めた座



鑄物師職許状 文政7年（1824）高森克明氏蔵（当館寄託）
真継家12代・康寧が高岡鑄物師・高森久右衛門に代替わりを許可したものの。

2. 明治前期 高岡銅器産業の形成



高岡銅器会社の製品 明治26年（1893）頃
シカゴ・コロンプス万博出品。向かって右・関義平作、中央・中杉与三七作。同社社長は大橋三右衛門。

高岡は明治維新により旧富山・加賀藩の、当時日本一と言われた「加賀象嵌」の技術を持つ彫金師たちを招き入れました。また当時の殖産興業の気運にも恵まれ、盛んに開催された万国博覧会や内国勸業博覧会・各種共進会に盛んに出品・受賞し、銅器産地としての地歩を確立するに至りました。白崎善平・関澤卯市・横山弥左衛門・室江吉兵衛・中杉与三七・関義平らの優れた彫金師たちや、角羽勘左衛門・金森宗七・大橋三右衛門・塩崎利平ら先見性に富んだ銅器問屋らが、精力的に技術の向上・開発や販路の拡大に努め「高岡金工」の名声を国内外に広め、今日の基盤を築いています。

一方、創始以来の鑄物師の特権は維新後一切廃止され、誰でも自由に開業できるようになり、高岡の金属工芸産業はいよいよ発展することになります。

3. 明治後期～昭和前期 銅器産業の近代化と発展

西欧では、高岡出身の美術商・林忠正の活躍もあり、日本の美術工芸品が大きなブーム(ジャポニズム)を呼んでいました。けれども、明治の中ごろよりその勢いは少しずつ衰えてきました。高岡銅器業界は林忠正の助言(明治19年『高岡銅工ニ答フル書』)もあり、改善をはかりました。

また富山県も高岡銅器の近代化に協力し、明治27年(1894)には富山県工芸学校(現・県立高岡工芸高校)を、大正2年(1913)には富山県工業試験場(現・県工業技術センター)を高岡に創設し、設備の機械化などを進めました。その結果、分業が可能になり、業界は明治初期までの工房生産から、鍛造・彫金・着色業などの小企業を問屋が統轄する「問屋制家内工業体制」へと移り、生産量が増大しました。

昭和10年(1935)には生産量が日本一となりました。けれども同12年以降は戦時統制経済により、金属原料の不足に苦しみます。同17年(1942)指定作家以外の製造は禁止され、銅器産業は完全に途絶えてしまいました。



林忠正著『高岡銅工ニ答フル書』
(明治19年)当館蔵

輸出不振に悩む高岡銅器業界に対し、市場調査やデザインの重視など、近代的な助言をしている。

4. 昭和後期～現代 戦後成長から未来への課題

高岡市は米空軍の空襲による被害を免れたので、銅器生産の設備は無傷で残りました。鋳物業者は、軍需物資ではなくなったアルミニウムに目をつけ、生活用品(鍋・釜)を生産しました。戦後の物資不足のなか、“作れば売れる”という「鍋釜景気」により、復興の足がかりをつかみました。その後もアルミ需要はますます高まったので、そのままアルミ産業に転向する業者も多くありました。



梵鐘の製作

梵鐘は戦時中の金属供出により全国の寺院から失われていたので、戦後、7代・老子次右衛門らの努力により、注文は高岡へ殺到した。現在も国内80%以上のシェアをもっている。

家内工業体制をゆるがす、多くの課題を抱えているからです。

これに対し、業界から海外での見本市への出展や、職人と問屋が共同して新商品開発を目指すなど、積極的な動きも出てきています。

平成17年には大澤光氏氏が国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました(高岡市民の人間国宝認定は、故・金森映井智氏について2人目)。

また高岡市では、平成18年度から市内全小・中・養護学校に「ものづくり・デザイン科」を創設しました。さらに高岡工芸高校の「目指せスペシャリスト」事業の実施や、富山大学芸術文化学部創設などにより、小学校から大学まで、ものづくりの一貫教育の環境が整い、高い技術と豊かな才能を持った多くの人材が育つことに期待をよせています。

一方銅器は、原料不足などの困難もありましたが、昭和23年の米軍特需をきっかけに、日用品が多数輸出されました。また梵鐘・仏具や火鉢・花瓶などの生産も増え、同30年代後半からの高度経済成長にのり大きく躍進しました。昭和50年(1975)には国の伝統的工芸品産地に指定されました。

梵鐘や大型ブロンズなどを主力として、全国シェアが9割を超えるとされる高岡銅器の販売額は、平成2年(1990)にピークを迎え374.5億円を記録しました。しかし近年は社会構造の変化により、低迷が続いています。それは設備投資の低下や経営の悪化、後継者不足など、産業の

基盤である問屋



戸出銅器団地

銅器関連業者の多くは、用地拡張、自動車社会への対応などのため、江戸初期以来の金屋町を離れ、昭和40年代から市内の長慶寺工業団地や、赤祖父の問屋センター、戸出銅器団地などに移った。